

スゴイ農業、スゴイJA

JA自己改革の現場から

写真：JA西条+筆者



利用者一人一人に深く関わり、家族と協働、 在宅生活を細やかに支える

——JA西条（愛媛県）小規模多機能型居宅介護事業所「武丈の里」の取り組み

郡山雅史（一般社団法人日本協同組合連携機構（JCA）主任研究員）

政府が2025年をめどに構築を目指す、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることを支える“地域包括ケアシステム”。その中核に位置付けられるサービスが“小規模多機能型居宅介護（※1 略称：小多機。以後、小多機と表記）”です。しかしながら、重度化し^{みと}看取りが近づくと連携病院へと利用者を誘導する医療法人経営の小多機など、その実態はさまざま。こうした中、利用者の在宅生活を深く捉え家族との協働を引き出し、月700回を超える訪問等により細やかに支える正統派小多機JA西条「武丈の里」の取り組みを紹介します（「武丈の里」は、平成29年度JAグループ愛媛介護事例報告会において、小多機のモデルとなり得る取り組みとして高く評価され「最優秀賞」を受賞）。

月700回を超える訪問など、
柔軟かつ細やかなケアで在宅生活を支える

JA西条（愛媛県西条市の一部を管内）が組合員の「泊まり」へのニーズの高まりを受け、平成28年7月に開設した小多機「武丈の

里」。平成30年8月末現在、登録利用者は20名。「要支援」の方が6名、「要介護」の方が14名、レアで個性的、難易度の高い方々で占められている（要支援であっても認知症の方は多い）。「杖をついた男の人が戸をトントンたた



① 武丈の里の外観（正面） ② タイムリーに訪問 ③ 利用者さんご夫婦宅で ④ 天然木に焼印した表札

くので怖い」といった妄想があり、深夜2時に訪問したこともある独居のOさん。アルコール依存症かつ肝性脳症と診断されているが、目を離すとすぐお酒を買って飲んでしまい24時間見守りが必要なTさん。首都圏から遠い親戚を頼り移住してきて、助け合いながら生活している全盲のKさんと認知症のあるYさん姉妹など、バラエティーに富んだ方がめじる押しである。

こうした方々に対し、「家が1番、武丈の里は2番でありたい……」と本人の暮らしにとって主役は自宅で、武丈の里はそれを支える脇役との位置付けから、一人一人に深く関わり、必要に応じ（要支援・要介護の枠を超えて）タイムリーに訪問するなど、柔軟かつ細やかな

ケアでその在宅生活を支えている。Oさんのケースでは、不安の原因を聞き、訪問や通所の回数を増やすことで一人になる時間を減らすとともに、24時間、電話がつながるようにし、必要なときは夜間でも訪問を行った。Tさんのケースでは、お酒を買っているTさんに街で遭遇すると、スタッフは勤務時間外でも駆け寄り武丈の里のスタッフにつなぐほか、地域の人も協力をお願いしている。必要な場合に限っているが、それでも訪問回数は月700回を超えた（訪問体制強化加算の認定条件は月200回以上。平成30年5、6月の訪問はその3倍超）。一方、タイムリーな訪問でニーズが減るのか「泊まり」の方は、5月は27回（2名）、6～7月は1～2回（1～2名）と、まだ少ない。



5



6

⑤テーブル（椅子座り）と畳コーナー（床座り）を一体化させた“たまり場”。小規模多機能ホーム「ぶどうの家」（倉敷市）を視察した際、民家の畳敷きの空間で在宅での自立した生活を促す“生活リハビリ”が行われているのを参考に畳の空間を取り入れた ⑥マニキュアを塗る利用者さん

強力な看護スタッフと 行動観察方式AOSにより医療の壁を突破

住み慣れた地域で最後まで暮らし続けることを支える小多機能にとって不可欠な“医療との連携”。しかし、認知症等に関する誤診、不適切な薬の種類や量の選択をはじめ、医療にかかる問題は少なくない。こうした状況に対し、武丈の里は強力な看護スタッフと認知症の方の“今”を知るツール、行動観察方式AOS（※2）をもって渡り合っている。

強力な看護スタッフというのは、武丈の里管理者の高橋八弓さんと一緒にデイサービスから志願してきた正看護師の伊藤裕子さん。利用者の立場から医者へのプライドを損ねないよう、穏やかに接しながらもがんがん切り込んでくれる。その上で連携もしっかり取ってくれる。

もう一つの切り札。それは、利用者の日常の動作や行動に関して本人や家族、介護者などが回答することで、本人の状態について共通の認識が持てるAOS。前出のOさんのケースでは、本人・家族・スタッフでAOSを取った結果、アルツハイマー型認知症という主治医の診断に疑念が生じセカンドオピニオンを求めようということになった。しかし、診断書を依頼してもなかなか書いてくれない主治医。

これまで診てくれた主治医を気遣う家族。ようやく説得し、認知症の診断で定評のある松山市の心療内科を家族と同行受診した結果、アルツハイマー型認知症でなく老人性妄想パラノイアとの診断に変わり、薬を変えた結果、Oさんの妄想がなくなり落ち着いて過ごせるようになった。

“引く”ことも重要！ “家族”、利用者ごとの“地域”とつながって支える

深く関わり細やかに利用者を支える武丈の里だが、同時に“引く”ことも大切だと考えている。病院の定期受診に付き添ってもらい、自宅で一緒に過ごせる日は手を出さないなど、チームの一員として“家族”に主体的に関わってもらっている。

また、日々の関わりの中で一人一人異なるその人の“地域”を見つけ、そのつながりを切らないことも大切にしている。毎日、武丈の里に旬の食材を使った手作りのお昼を食べに来ていると聞いたが、取材当日、姿が見えなかったOさん。その日は、武丈の里へ、ではなく地域が開いているミニデイの方に出かけたとのこと。ミニデイに出かけ地域と関わり続けることでOさんはこれまで通り変化に富んだ日常を送ることができる。



⑦視察先の託老所あんき（松山市）から学んだ浴室—脱衣所—トイレが連続した水回り空間。トイレで失敗した利用者が体面を保つことができ、汚れた衣服をぬれ縁に出せるため臭いがこもらない

利用者同士の関係も重要だ。

近頃、俳句作りにはまっている首都圏から移住してきた姉妹の姉のKさん。目標とする俳句が上手な（アルコール依存症の）Tさんに作った作品を添削してもらうようになった。すると、これまでスタッフがいくら言ってもお酒をやめなかったTさんが、添削の日だけはお酒を飲まないで（武丈の里に）来るように……。Tさんの中で生まれた小さいようで大きな変化。スタッフたちにとって、何にも代え難いうれしい出来事だ。

このように自分たちだけでなく、家族や地域と一緒に支えることを重視する武丈の里。ここで、役立っているのが、前述したAOSである。認知症の方の“今”を積み重ねて見ることにより、その方の状態の移り変わりや認知症の重症度を推測するだけでなく、家族と事業所の連携ツールとしての活用を目的に取り入れられたAOS。一緒にチェックすることで家族が利用者について言語化できなかった悩みをスタッフに伝える、スタッフがケアで苦慮している部分を家族に理解してもらう、スタッフごとに異なる利用者への見方を互いに気付き合うなど、根拠に基づいた利用者への認識を支援者同士が共有し、つながる上で大きな効果を上げている。

“臨機応変さ”がポイントとなる小多機のケア

お昼だけ食べにくる人もいるなど、武丈の里の「通い」（9～17時）では毎日10名前後の方が好きなきときに来て、好きなきときに帰っていく。デイサービスなどに比べ少数に絞り込んだ利用者を看ることができる小多機。一人一人と深く関わり、その生活パターンや好みを知ることができるため、臨機応変な対応を取りやすい。以前、勤務していたデイサービスでは、マニュアルに沿ってじゃないとできないと思っていた高橋さん。現在は、“臨機応変さ”が最も重要だと考えるようになった。だが、同じケースが一人としておらず、レアな方ばかりで掘り下げれば掘り下げるだけ難しく、本当に「こうすればよい」という答えがない。そうした高橋さんが、志願する際、臨機応変力の高さを見込んで声をかけたのが、やはりデイで同僚だった介護福祉士の篠原由佳里さん。以前、訪問から帰ってきたスタッフの話聞きおかしいと、再びお宅に伺うと、案の定、利用者さんが転倒していた。病院に担ぎ込んで検査すると、骨折と判明。すぐ、手術となったが、篠原さんが機転を利かせて対応、乗り切った。「難しい利用者さん一人一人にきちんと向き合うことで、別の方に応用できる力がつく」と小多機のモデルとなった



⑧自ら志願して来た武丈の里の中心スタッフ（左から、管理者の高橋さん、介護福祉士の篠原さん、正看護師の伊藤さん）
 ⑨クリーン活動の日～ボランティア（地域）の方々・利用者さんたちと加藤介護福祉課課長（前列左から1人目）

「宅老所」の関係者がよく言う言葉がある。武丈の里のスタッフ（現在、8名）は、難しい利用者さん一人一人に向き合うことで日々、経験を重ね、臨機応変に対応できるスキルを培っているようだ。

ところで、時には深夜にも発生するタイムリーな訪問（当番のスタッフが専用の携帯を持ち帰る）。スタッフの方々は大丈夫なのだろうか？ 心配になり尋ねると「ははは、月700回を超えていますね（笑）」と高橋さん。負担感について聞くと、「ないです」と即答。「武丈の里はスタッフの表情が良いので、訪問回数が多くても大丈夫」とJA愛媛中央会福祉アドバイザーの松本栄^{まつもとさかえ}さんは語る。

「看取り」を視野に……中重度化しても粘り強く支えられる小多機づくり

最近、お孫さんが出産のため、98歳の利用者さんが1か月連続で武丈の里の「泊まり」を利用した。頑張って支えている娘さんと利用者さんに接するうちに、「最後まで見てあげたいよね」という気持ちがスタッフ間に芽生えつつある。

現在、登録利用者数20名という“人数”を目標に設定し、武丈の里を切り盛りするJA西条介護福祉課の加藤拓^{かとうたく}課長。要介護3以上になると、利用者が施設等に入所してしまうことが多く、本人が在宅での生活を断念せざる

を得ないだけでなく、事業所にとっても収益が大きく落ち込んでしまう。加藤課長は、でこぼこはあるものの去年と比べ今年は登録利用者数が安定し、採算ラインまでもう一歩だと語る。

「看取り」ができるぐらいでないと経営が難しいといわれる小多機。安定した経営を目指す上で、取れる加算は取りつつ（現在、取得可能な未取得加算を申請すれば黒字に転化）、「看取り」をも視野に入れ、中重度になっても粘り強く在宅生活を支えられるよう一層の力をつけることが、武丈の里の次なる課題となっている。

【加算取得状況】（2018年8月末現在）

初期加算、認知症加算Ⅰ・Ⅱ、看護職員配置加算Ⅰ、総合マネジメント体制強化加算、介護職員処遇改善加算（訪問体制強化加算は取得準備中）。

【脚注】

※1：小規模多機能型居宅介護

月額定額制で、365日、24時間、共通した職員から「通い」「訪問」「泊まり」を柔軟に組み合わせた（専属のケアマネジャーがおり、ケアマネジメントが一体化した）ケアが受けられる。人数登録制のため、なじみの利用者、職員と家庭的な雰囲気の中で「通い」を過ごすことができる。

※2：行動観察方式AOS（Action Observation Sheet）
 医療法人敦賀温泉病院院長の玉井顯^{たまいあきら}先生が「認



植えつけや収穫も行う敷地内に設けられた“ブチ畑”

「知症重症度評価」の一つであるSSDS (Screening Scale for Dementia Severity) をベースに開発。日常の生活動作に関する5項目と日常生活行動に関する48項目で構成される、所要時間7～8分程度の簡易なアンケート形式の認知症評価尺度。本人の日常生活における行動や態度等に関する本人にかかわる人のチェックに基づくスケールから認知機能や症状の程度を評価する。家族・本人、介護従事者等、観察者のかかわりにより点差が生じることを前提とし、その点差自体を評価対象とすることにより、共通言語化及び共通の認識を図ることができる。

こおりやま・まさふみ

1987年3月、芝浦工業大学大学院修士課程修了。一級建築士。(社)地域社会計画センター研究員(1998年4月～)を経て、2018年4月より現職。現在の主な研究テーマは、高齢者福祉を軸とした地域づくり。

最近の仕事：現地レポート「宅老所に学ぶ古民家再生型デイの取り組みJAひがしうわ稔の郷『清沢』」(JC総研REPORT Vol.38)、「JAはが野が取り組む『個を見る視点強化』による個別ケアの実践」(JC総研REPORT Vol.41) 他。

農業・地域・JAを担うリーダーの雑誌



2月号 定価 606円(税込)

JAグループ 家の光協会
〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11
TEL:03-3266-9002 FAX:03-3266-9047
<http://www.ienuohikari.net>

特集 キーワードは「納得感」 生産部会 活性化のヒントを探せ!

共同販売の拡大はJAグループの自己改革に欠かせないものですが、一元化した“大きなロット”では、多様化する消費者・実需者のニーズに対処しづらいケースも。そこで、「複数共計による小グループ化」のほか、組合員農家の意欲を向上させながら、生産部会の結集力を高めるヒントを探ります。

イライラしがちなあなたに アンガーマネジメント入門

“怒り”は自身が疲れるだけでなく、円滑な人間関係の妨げにも。それをコントロールするのが「アンガーマネジメント」。たんに怒らないようにするのではなく、自身の感情を見つめ、コントロールするメソッドを伝授します。

(タイトル、内容は変更することがあります)

※本誌掲載のJA西条小多機「武文の里」の取り組みについては、詳細版をJCAホームページ「研究REPORT」(<https://www.japan.coop/>)に年内アップ予定。